

3 カリキュラム・マネジメントの充実

□ ICT端末等を活用した指導は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実に向けて、組織的、計画的に進められていますか。

ICT端末は、これからの学校教育に必要不可欠なものであり、基盤的なツールとして最大限活用していくことが求められており、授業における学習活動はもとより、授業以外を含め、様々な活用により学びを充実させることが重要です。

各学校では、生徒自身がICTを「文房具」として自由な発想で活用できるよう組織的、計画的な取組を推進し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図っていく必要があります。

ICT端末等の活用に向けて

北海道教育庁学校教育局義務教育課

段階		ステップ1 (積極的に活用する)	ステップ2 (効果的に活用する)	ステップ3 (主体的に活用する)
児童生徒	授業	<ul style="list-style-type: none"> 検索サイトを活用した調べ学習 キーボード等による文字入力 文書作成ソフト、プレゼンソフトを活用した資料等の作成 デジタル教材を活用した問題解決 など 	<ul style="list-style-type: none"> クラウドを活用した考えの共有、資料等の共同作成、閲覧 ウェブ会議やチャット機能等を活用した意見交換 各種ソフト等を活用した情報の分析、加工 など 	<ul style="list-style-type: none"> 探究のプロセス（学習活動の各段階）の様々な場面において、各種ソフト等を目的に応じて選択、活用して問題解決 など
	授業以外	<ul style="list-style-type: none"> 朝の健康観察、アンケート等に回答 休み時間や放課後等における各種ソフトの活用 など 	<ul style="list-style-type: none"> クラウドを活用した資料等の共同作成、閲覧 ウェブ会議やチャット機能等を活用した係活動、児童会・生徒会活動、部活動等の連絡 学習の予定や計画等の作成、閲覧 など 	<ul style="list-style-type: none"> ウェブ会議やチャット機能等を目的に応じて選択、活用して意見交換 授業と連動した個別の課題を解決する家庭学習 など
教職員	業務改善	<p>業務の効率化、事務作業にかかる時間の減少により、本来担うべき業務に専念</p> <ul style="list-style-type: none"> ウェブ会議を活用した会議や研修等 クラウドを活用したデータ連携・データ分析（アンケート集計、学籍・保健管理等） クラウドを活用した各種資料の共有（会議資料、学習指導案や教材、実践事例等） クラウドを活用した保護者等との連絡（懇談会等の日程集約や出欠確認等） 		

ステップ1

「ステップ1」は、「すぐにでも、どの教科でも、誰にでも活用できる」など、積極的に活用する段階としています。

【検索サイトを活用した調べ学習の具体例】

- 一人一人が情報を検索し、収集、整理する。
- 生徒自身が様々な情報にアクセスし、主体的に情報を選択する。

ステップ2

「ステップ2」は、「1人1台端末を活用して、教科の学びを深める、教科の学びの本質に迫る」など、効果的に活用する段階としています。

【各教科等における活用例】

- 国語科において、文書作成ソフトで文書を書き、コメント機能等を用いて助言しあう。
- 理科において、観察、実験を動画等で記録することで、現象を科学的に分析し、思考を深める。

ステップ3

「ステップ3」は、「1人1台端末を活用して、教科の学びをつなぐ、課題解決に生かす」など、主体的に活用する段階としています。

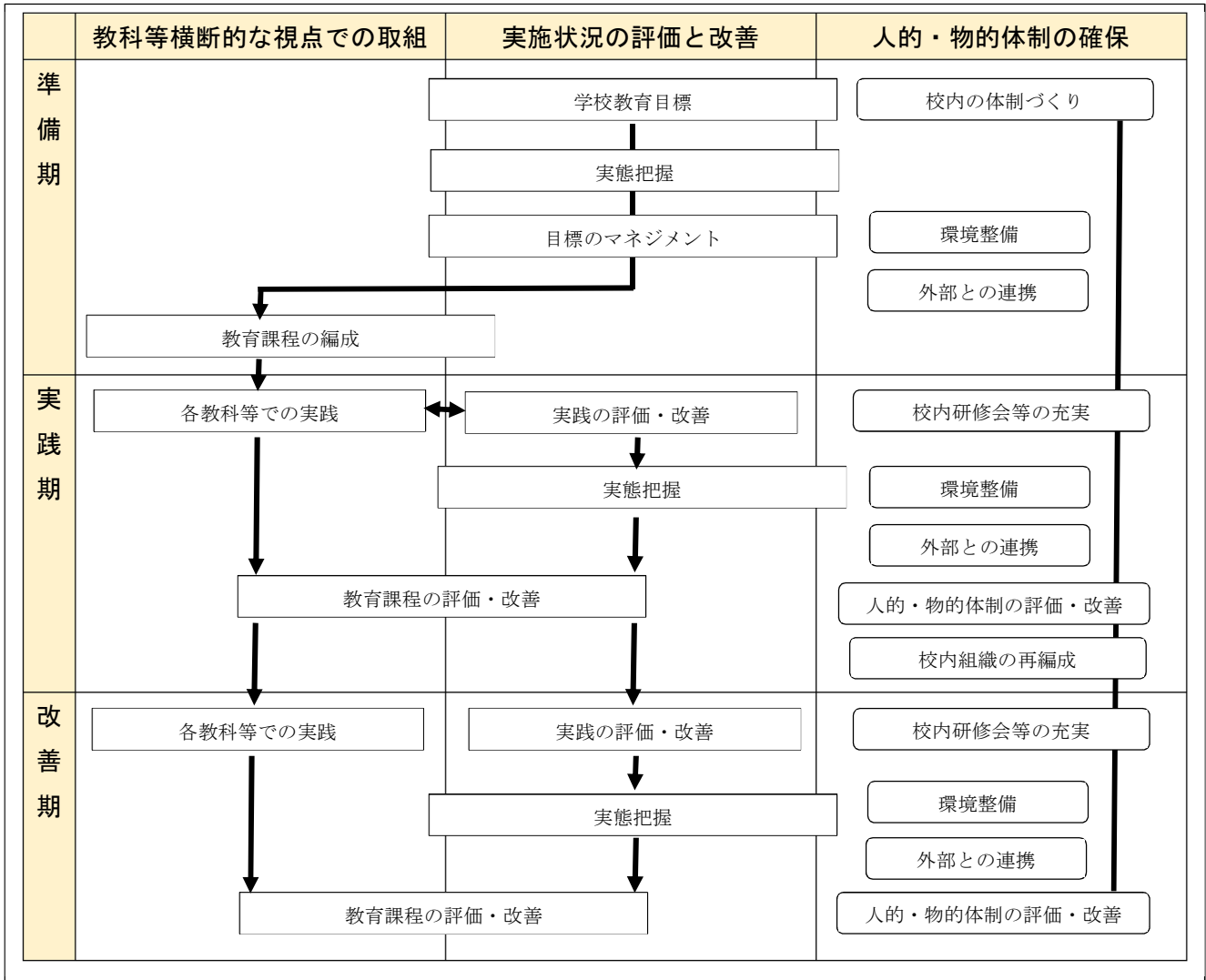
【探究のプロセスにおける活用例】

- 「整理・分析」において、統計による分析、思考ルール、テキストマイニングで分析する。
- 「まとめ・表現」において、論文作成、プレゼンテーション等で発信する。

□ ICT端末等の活用に向けた取組は、カリキュラム・マネジメントの全体像（三つの側面ごとの取組や長期的・短期的な視点など）を共有しながら、進められていますか。

各学校では、教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図っていくことが求められており、教育課程の編成を含めたカリキュラム・マネジメントに関わる取組を、学校の組織全体の中に明確に位置付けるとともに、全ての教職員で何を目標として、いつまで、どのような取組を進めるのかを共有することが重要です。

【情報活用能力（学習の基盤となる資質・能力）を育成するためのカリキュラム・マネジメント例】



カリキュラム・マネジメントの例

上記例では、横軸は、学習指導要領解説総則編で示されたカリキュラム・マネジメントの三つの側面における取組を示し、縦軸は、長期的な視点で捉えることができるよう「準備期」「実践期」「改善期」の三つの時期を設けています。

三期のサイクルについては、単年度で行う場合や、複数年度で行う場合などが考えられ、各学校の生徒や教職員の実態を的確に捉えて、設定することが必要です。

【実態把握】

各種調査結果やデータ等を活用し、生徒の資質・能力の定着状況を把握することが必要です。情報活用能力については、次の質問調査の項目が参考になります。

(文部科学省 web ページ)

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/mext_00028.html

【目標のマネジメント】

目標の設定においては、学校として育成を目指す資質・能力と各教科等の関連性を整理して目標を設定し、全教職員で共通理解を図ることが必要です。